

金剛峯寺藏中尊寺一切経本
『続高僧伝』巻四 翻刻

鶴見大学仏教文化研究所 池 麗梅

凡例

- 一、本翻刻は、金剛峯寺所藏中尊寺一切経本『続高僧伝』巻四の全文をできる限り原文に忠実に翻刻したものである。
- 一、翻刻文の行取りは原文に従い、各行頭に算用数字で行番号を附した。
- 一、文字の大小や配置などの表記については、原則として原文の通りとなるように配慮した。
- 一、漢字は、原則として正字体を用いることとしたが、原文の字体が正字体と大きく異なる場合や複数の字体が用いられている場合等は、原文の字体そのまま最も近いものを用いた場合もある。その際、原則として一々その旨を注記していない。
- 一、行間にある書き入れについては、「(補)」(補入符)・「(顛)」(顛倒符)・「(見せ消し)」(見せ消し)等の符号を翻刻本文中に示すと共に、「※」を当該文字の傍に附し、翻刻註記として翻刻文の下欄に記した。
- 一、虫損・難読箇所はその字数分を「□」によつて示した。また、文脈や残割等によつて当該文字を補った場合は、その文字を「□」で囲んで示した。
- 一、その他、稿者の注記は、全て「()」に括つて傍記するか、「※」を当該箇所を附して翻刻文の下欄に記した。

【付記】貴重な資料の公開を快く御許可下さつた所蔵機関の金剛峯寺霊宝館御当局、マイクロフィルム紙焼きをご提供下さつた京都国立博物館御当局、および関係者各位の格別な御高配に深く感謝を申し上げます。

續高僧傳卷第四

譯經篇四 本傳一人

京師弘福寺釋玄奘傳

- 1 釋玄奘、俗姓陳氏、浴州偃師人。二親早喪、昆
- 2 秀相養。兄素出家、即長捷法師也。容兒堂堂、
- 3 儀局瓌秀。講釋經義、班聽羣伍。以奘少罹窮
- 4 酷、偏意携守。日授精理、旁兼巧論。年十一、誦
- 5 維摩・法華、東都恒度、便預其次。自尔卓然、
- 6 不偶朋流、口誦因緣、畧无閑缺。觀諸沙彌劇
- 7 談掉戲、奘曰、「經不云乎、夫出家者為无法。豈
- 8 復恒為兒戲、可謂徒喪百年。且思齊之懷、當
- 9 鄙而不取、拔萃虫類、復形在言前耳。」時東都
- 10 慧日盛弘法席、涅槃・攝論、輪馳相係。每恒聽受、
- 11 昏明思擇。僧徒異其欣奉、美其風素、愛敬之
- 12 至、師友參榮。大衆重其學功、和開役務。由是
- 13 專門受業、聲望弘遠。大業餘曆、兵飢交貿、法
- 14 食兩緣、投庇无所。兼沙門道基化開井絡、法
- 15 俗飲仰、乃与兄從之。行達長安、住莊嚴寺。又
- 16 非本望、西踰劔閣、既達蜀都、即而聽受阿毗
- 17 曇臨、一聞不志、見稱昔人。隨言鏡理、又高倫

【翻刻注記】

4 浴、「洛」の誤写。

5 秀、「季」の誤写。

6 班聽、「聰班」の誤写。

12 虫、「出」の誤写。

18 飲、「欽」の誤写。

20 志、「論」の誤写。

21 等。至於婆沙廣論、雜心玄義、莫不鑿窮巖穴、
 22 條疏本幹。然此論東被、弘唱極繁、章鈔異同、
 23 計逾數十。皆蘊結匈府、聞持自然。至於得喪
 24 筌旨、而能引用无滯。時皆訝其憶念之力、終
 25 古罕類也。基每顧而歎曰、「余少遊講肆多矣、
 26 未見少年神悟若斯人也。」席中聽侶、僉号英
 27 雄、四方多難、捨歸綿蓋、相与稱贊、逸口傳聲。
 28 又僧景攝論、道振迦延、世号難加、人推精西
 29 敷。皆師兼宗據、隅隩明鈴。昔來攝論十二住
 30 義、中表銷釋、十有二家、講次誦持、率多昏漠。
 31 而裝初聞記錄、片无差舛。登坐叙引、曾不再緣。
 32 須便為述、状逾宿構。如斯甚衆、不可彈言。年
 33 二十有一、為諸學府、雄白沙門、講揚心論、不窺
 34 文相、而涌注无窮。時目神人、不神、何能此也。晚
 35 与兄俱住益南空慧寺。私自惟曰、「學貴經遠、
 36 義重踈通。鑽仰一方、未成探蹟。有沙門道深、
 37 體悟成實、學稱包富、粒權敷化、振納趙邦。
 38 發内心、将指巴蜀。」捷深知其遠量也、情願勤
 39 勤、每勸勉之。而正意已行、誓返面。遂乃假緣
 40 告別、間行江碇、經途所及、荊楊等洲、訪逮道
 41 隣、莫知歸詣。便北達深所、委參勇鍔、素龍衣

25 余、「余」の誤写。
 27 蓋、「益」の誤写。
 28 西敷、「嚴」の誤写。
 29 鈴、「銓」の誤写。
 32 彈、「殫」の誤写。
 33 白、「伯」の誤写。
 37 粒、「控」の誤写。
 38 指、「捐」の誤写。
 41 龍衣、「襲」の誤写。

42 嘉問、縦洽无遺、終始十月、資養畧盡。時燕趙
 43 學侶、相顧逢秋、後發前至抑斯也。沙門慧林、
 44 道聲高逸、行解相副、夸罩古今、獨據鄴中、昌
 45 言傳授、詞鋒所指、海內高尚。又往從焉。不面生
 46 來、相逢若舊、去師資礼、事等法朋。偏為講雜
 47 心・攝論、指摘纖隱、曲示綱猷。相續八月、領酬
 48 無數。休驚異絶嘆、撫掌而嗟曰、「希世若人、尔
 49 其是也。」沙門道岳、宗師俱舍、闡弘有部、包籠
 50 領袖、吞納唯襟、楊業帝城、來儀羣學、及又從
 51 焉。創迹京都、詮途義苑。沙門法常、一時之最、
 52 緣綸教悟、其從如林。奘乃一舉十問、皆陳幽
 53 奧、坐中犯梓、拔思未聞。由是馳譽道流、檀聲
 54 日下。沙門僧辨、法輪論士、機慧是長、命未連
 55 坐、吾之徒也。但為俱舍一論、昔所未聞、因尔
 56 伏膺、曉夕諮請。岳審其殷至慧悟、霞明樂説
 57 不窮、任其索隱、覃思研
 58 採、辟周究竟。沙門玄會、近割[※]涅槃、補舊疏、更
 59 張琴瑟。兼斯令問、親位席端、諮質遲疑、渙然
 60 祛滯。奘又惟曰、「余周流吳蜀、受逮趙魏、未及周
 61 秦、預有講筵、率皆登踐。已布之言、雖蘊匈襟、
 62 未咄[※]之調、宗解籤无地。若不輕生殉命、誓往

48 休、「林」の誤写。
 50 及唯、「乃喉」の誤写。
 52 緣、「経」の誤写。
 53 犯、「杞」の誤写。
 54 未、「求」の誤写。
 58 割、「剖」の誤写。
 60 受、「爰」の誤写。
 62 咄、「吐」の誤写か。

83 華胥、何能具覲成言、用通神解。一觀明法、了
 82 義真文、要返東華、傳揚聖化、則先賢高勝、豈
 81 決疑於弥勒、後進鋒穎、寧輟想於瑜伽邪。遂
 80 厲然獨舉、詣闕陳表、有司不為通引。頓迹京
 79 臯、廣就諸蕃、遍學書語、行坐尋授、數日傳
 78 通、側席面西、思聞機候。會貞觀三年、時遭霜
 77 儉。下勅、道俗隨豐四出。幸因斯際、任往如臧、漸
 76 至檄躋。路由天塞、裹粮予影、前望悠然、但
 75 見平沙、絶无人任。廻遑委命、任業而前、展轉
 74 因脩、達高昌境。初奘在京州講楊經論、花夷
 73 土庶、盛集歸崇、商容通傳、預聞蕃域。高昌王麴
 72 文泰、得信佛經、復羨奘告、將遊西鄙、恒置郵
 71 駟、境次相迎。勿聞行達、通夕立候、王母妃厲、執
 70 炬殿前。見奘苦辛、備言意故、令宮下淚、驚異
 69 希有、延留憂坐、長請開弘。王命為、母命為子、
 68 殊礼厚供、日時恒致。乃為講仁王等經、及諸
 67 機教、道俗係戀、並願長留。奘曰、「本欲通開大
 66 化、遠被家國、不辭賤命、忍死西奔。若如来語、
 65 一滯此方、非唯自虧發足、亦恐觀為法障。」僉
 64 見極意、无敢措言。王母曰、「今法師一遇、並是因
 63 緣。脱得果心東返、願重垂誠誥。」遂与奘手傳

77	76	75	73	72	70	69
憂、 <u>「夏</u>	令、 <u>「合</u>	厲、 <u>「忽</u>	容、 <u>「土</u>	京、 <u>「脩</u>	予、 <u>「躋</u>	任、 <u>「徑</u>
の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。
。						下同。

- 84 香信、誓為母子。麴氏流淚、執足而引。仍勅殿
 85 中侍郎、賣紬綾五百疋、并給從騎六十人、送至
 86 突厥業護牙所。以大雪山北六十餘國、皆其
 87 部統、故重遣達、奘開前路也。初至牙所、信物
 88 倍多、異於恒度、謂是親弟。具以情告、終所不
 89 信。可汗重其賄賂、遣騎前告所部諸國、但有
 90 名僧勝地、必令奘到。於是連騎數十、盛若皇花。
 91 中途經國、道次參候、供給頓具、倍勝於初。自
 92 高昌至於鐵門、凡經一十六國、人物優劣、奉
 93 信淳踈、具諸圖傳。其鐵門也、即鐵門關、漢之
 94 西厓[※]。入山五百、旁无異路、一道南出、險絕人
 95 物。左右石壁、竦立千仞、色相如鐵、故因号焉。見
 96 澳門扉、一豎一卧、外鐵裏木、加懸諸鈴。必掩此
 97 關、寔惟天固。南出斯門、土田温沃、華菓榮茂、地
 98 名觀貨羅也。從[※]于餘里、廣三千餘。東拒葱嶺、
 99 西接波斯、南大雪山、北據鐵門。縛菊[※]大河、中境
 100 西流、即經所謂博叉河也。其境自分為二十七國、
 101 各有君長、信重佛教。僧以十二月十六日安居、坐
 102 其春分、以其時温熱雨多故也。又前經國、凡度
 103 十三、至縛唱[※]國。土地華博、時俗号為小王舍城、
 104 國近葉護南牙也。突厥常法、夏居北野、花草

84 引、「別」の誤写か。

86 業、「葉」の誤写。

94 厓、「屏」の誤写。

98 從、「千」の誤写。
 99 菊、「菊」の誤写。

103 唱、「喝」の誤写。

125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105

繁茂、放牧為勝、冬處山中、用遮寒厲、故有兩牙
 王都。城外西南寺中、有佛澡灌、可容斗許、及佛
 掃帚、并以佛牙、守護莊嚴、殆難瞻覩。奘為
 國使、躬事頂戴。西北不遠、有提謂・波利兩城、
 建塔表靈、即爰初道成、獻麩長者本邑之髮
 爪塔也。又東南行大雪山中、七百餘里、至梵衍國。
 僧有數千、學出世部。王城北山、有立石象、百五
 十尺。城東卧佛、長千餘尺。並精舍重接、金寶莊
 校、晃曜人目、見者稱嘆。又有佛齒舍利、劫初緣
 覺齒、長五寸許、金輪王齒、長三寸許、并商
 那和脩蓋、及九條衣、絳色猶存。又東山行、至遊^{*}
 畢誠國。奉信彌勝、僧有六千、多大乘學。其王
 歲造銀象、舉高丈八、延請遐迩、廣樹名檀。國有
 如來為菩薩時齒、長可寸餘。又有其髮、引長
 尺餘、放還螺旋。自斯地北、民雜胡戎、制服威儀、
 不參大夏、名為邊國蜜利車類、唐言釋^{*}之垢
 濁種也。又東百七、至濫彼國、即印度之北境
 矣。言印度者、即天竺之正名、猶身毒賢豆之
 訛号耳。論其境也、背北雪山、三乘^{*}大海、地形南狹、
 如月上弦、川平廣衍、周九万里。七十餘國、依止其
 中、時或乖分、畧地為國。今則盡三際^{*}、同一王

123 乘、「垂」の誤写。

121 彼、「波」の誤写。

120 釋、「譚」の誤写か。

115 遊、「迦」の誤写か。

126 命。又東雪山之那伽羅曷國、即布髮掩泥之故
 127 地也。詳諸經相、意有疑焉。何則、計尋本事、乃
 128 在賢劫已前、蓮花定光名殊、三佛既非同劫、
 129 頻被火災。何得故處、今猶泥濕。若以為虛、佛
 130 非妄語、如彼諸師異、各陳異解。有論者言、此
 131 實本地、佛非妄也。雖經劫壞、本空之處、願力
 132 莊嚴、如因事也。並是如來流化、斯迹常存、不足
 133 怪矣。故其勝地、左側標樹、諸窠觀波、即靈塔
 134 之正名、猶偷婆斗敷婆之訛号耳。阿育王者、
 135 此号无憂、恨不覩佛、興諸感戀、往是聖迹、皆
 136 起銘記。故於此處、為建石塔、高三十餘丈。又有石
 137 辟佛影、踏迹衆相、皆豎標記、並如前也。城南
 138 不遠醯羅城、有佛頂骨、周尺二寸、其相仰平、
 139 形如天蓋。佛體體蓋、如荷葉盤。佛眼圓精、狀
 140 如奈許、澄淨皎然。有佛大衣、其色黃赤。佛之
 141 錫杖、以鐵為環、紫檀為筍。此五聖迹、同在一城、
 142 固守之務、如傳國寶。北近突厥、昔經侵奪、雖
 143 至所在、還潛本處。斯則起緣隱蹟、未在兵威。
 144 樊奉觀靈相、悲淚橫流、手撥未香、親者體狀、
 145 倍增欣悅。即以和香、印其頂骨、觀有嘉瑞、又
 146 增悲度。近有北狀大月支王、欲知來報、以香取

146	144	143	141	139	137	133	130
狀度、	者未、	起、	筍、	體、	辟、	波、	異、
「慶」	「末」	「赴」	「筍」	「欄」	「壁」	「彼」	「衍字」
の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	か。

167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147

相、乃示馬形、甚非^{※所}望。加諸布施、積功懺悔、又以香取、現師子形。^種雖位獸王、終為畜類、情倍歸依、又以加施戒、乃現人天、方還本國。故其俗法、見五相者、相一金錢、取其相者、酬七金錢。俗利其實、用充福物。既非僧掌、固守弥崇、无論道俗、必先酬價。奘被王命、觀視具周、旁国諸僧、羨斯榮望、同來礼謁。又東山行、至健駄邏國。佛寺千餘、民皆雜信。城中素有蓋廟、衆事莊嚴。昔如来盜經於此廟、乃數百年、令移彼王宮供養。城東有迦膩王大塔、基周里半、佛骨舍利、一斛在中。舉高五百餘尺、相輪上下、二十五重。天火三災、今正營構、即在中所謂雀離浮圖是也。元魏靈太后胡氏、奉信情深、遣沙門道生等、費大幡長七百餘尺、往彼掛之、脚財及地、即斯塔也。亦不測雀離名生所由。左側諸迹、其相極多。近則世親如意造論之地、遠則捨於千眼、睽奉二親、檀特名山、達拏本迹、仙為女乱、佛化鬼母、並在其境。皆无憂王為建石塔、高者數百餘尺、立標記焉。自北山行達烏伏那國、即世中所謂北天竺存長国也。其境周輪五千餘里、果實充備、為諸國重。傳云、「即昔輪王之苑囿也。」僧有万餘、兼大

147 所、墨書入れにより補入。

155 令、「今」の誤写。

168 乘覺[※]。王都四周、多諸古迹。忍仙佛跡、半偈避讎[※]、折
 169 骨書經、割肉代鴿、地藥護命、血飲夜叉、如斯等相、
 170 備列其境。各具瞻奉、情倍欣欣。城之東、減三百里、大
 171 山龍泉、名阿波邏、即信度河之本源。西南而流、經中
 172 所謂辛頭河也。王都東南、越山逆河、鐵橋棧道、路極
 173 懸險、千有餘里、至極大川、即古焉[※]仗之王都也。中有
 174 木慈氏象、高百餘尺、即末田地羅漢將諸士人、三返
 175 上天、方得成者。身相端嚴、特難陳說。返烏[※]仗、南
 176 至咄叉始羅國、具見伊羅鉢龍所住之池、月光決
 177 月之地。育王[※]、舉高十丈。北有石門、殊極高大、
 178 崇竦[※]重山、道田中過、斯又薩埵捨身處也。自此東
 179 南、山行險阻、經一小國、度數鐵[※]、減二千里、至迦濕
 180 彌羅國、即此俗常傳闍賓是也。莫委羅賓、由
 181 何而生、觀其圖城、同闍賓耳。本是龍海羅漢
 182 取之、引衆而住、通三歲也。故其國境、四面負
 183 山、周七千餘里、門徑[※]狹迳。僧徒五千、多學小
 184 乘。國有佛牙、長可寸餘、光白如[※]。自濫波至此、統
 185 山諸國、形體鄙薄、俗習胡蕃。雖預五方、非印度
 186 之正境也。以住居山谷、風雜諸邊。自此南下、通
 187 賢[※]无山、將及千里、至磔迦國。土據平川、周方
 188 餘里、兩河分注、卉木繁漸。次東南、路經六

187	賢、 「覽」 の誤写。
183	徑、 「徑」 の誤写。
180	羅、 「闍」 の誤写。
178	竦、 「繒」 の誤写か。
177	月、 「目」 の誤写。
175	特、 「持」 の誤写。
174	士、 「工」 の誤写。
173	焉、 「烏」 の誤写。
169	地、 「讎」 の誤写。
168	覺、 「學」 の誤写。

209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189

國、多有遺迹。育王標塔、高二十丈者、其數不少。中有末菟羅國、最餘蹤緒。城東六里、有一山寺、昔烏波邇多、唐言近護、即五師之一也、是其本住所建。北巖石室、高廿餘丈、廣卅步。其側不遠、復有彌猴墮坑處、四佛經行處、賢聖依住處、靈相衆矣。又東南行、經千七國、至却比他國。俗事大自在天、其精舍者、高百餘尺、中有天根、形極偉大。謂諸有趣由之而生、王民同敬、不為鄙恥。諸国天祠、率置此形、大都異道、乃有百數、中所高者、自在為多。有一大寺、五百億徒、淨人僕隸、乃有數万、皆宅某寺側。中有三道階、南北而迳、即佛為母勿利安居、夏竟下天、帝釋之所作也。寶階本基、淪沒並盡。後王放之、在其故地、猶高七十餘尺。育王為建石柱、高七丈餘、光淨明照、隨人罪福、影現其中。旁有賢劫四佛經行石基、長五十許步、高千七尺、足踏所及、皆有蓮花文生焉。國西不遠、二百許里、至羯若鞠闍國、唐言曲女城也。王都臨饒伽河、即河之正名矣。源從北來、出大雪山。其土邪正雜敬、僧徒盈万、多諸聖迹、四佛行坐處、七日說法處、佛牙髮爪等塔。

208 207
土、饒、
「土」の誤写。

199
億、
「僧」の誤写。

194
却千、
「于」の誤写。

190
餘、
「饒」の誤写。

230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210

精舍千餘、名寺異相、多臨河北。王号戒日、正
法治世、将五十載。言戒日者、諡法之名。此方
薨後、量德以贈、彼士初登、即先薦号、以滅後
美之、徒虚名耳。今猶御世、統五印度。初治邊
乘、為小國也。先有室商佉王、威行海内、酷虚
无道、劉殘釋種、拔菩提樹、絕其根苗、選簡名
德三百餘人悅之、餘者並充奴隸。戒日深知
樹於禍始也、与官属至菩提坑、立大誓曰、「若
我有福、統臨海内、必能崇建佛法、願菩提樹
從地而生。」言已尋視、見菩提崩坑中上踊。遂迴
兵馬、往商佉所、威福力故、當即除滅。所以抱
信誠篤、倍發由来、還統五方、象兵八萬、軍威
所及、並藉其力。素不血食、化境有羊、皆贖施
僧、用供乳酪。五年一施、傾其帑藏、藏盡還蓄
時至復行、用此為常。有犯王法、乃至叛逆、罪
應死者、遠斥邊裔、餘者徵罰、蓋不足言。故諸
國中、多行盜竊、非假伴授、不可安進。又東南
行二千餘里、經于四國、達憍償弥、外道殷盛。
王都城、有佛精舍、高六十尺、中有檀象、即
昔優田大王造之、放在天之景也。其側龍窟
聖迹多矣。又東北千餘里、至室羅代悉底國、

230	226	219	216	215	214	212
代、	安授、	迴	悅、	劉、	虚、	士、
「伐」	「授」	「迴」	「沈・坑」	「劍」	「虚」	「士」
の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写か。	の誤写。	の誤写。

231 即舍衛舍婆提之正名。周睨荒毀、財有故基、斯
 232 匿治宮、須達故宅、趾墟存焉。去城五里、有逝
 233 多林、即祇陁園也。勝軍大臣善施所造、今寺
 234 頽滅、尚有石柱、舉高七丈、育王標樹。邊有埵
 235 室一區、中安如來為母說法象。目餘院守、湮
 236 沒蕩盡。但有佛洗病比丘處、目連舉身子衣
 237 處、佛僧常汲故井處、外道陰誘殺姪女處、佛
 238 異論處、身子桶處、瑠璃沒處、得眼林處、迦葉
 239 波佛本生地。諸如上處、皆建石塔、並無憂王
 240 之所造也。寺東不遠、三大深坑、即調達瞿波
 241 戰遮女人所沒之處。坑極深邃、臨望无底、自
 242 古及今、大雨洪注、終无溢滿。又東將七百里、
 243 至劫毗羅代羅窣堵國、即迦毗羅衛淨飯王
 244 所治之都也。空城十餘、无人栖住、故宮甃城周
 245 十五里、荒寺千餘、唯宮中一所存焉。王寢殿
 246 基上有銘塔、即如來降神之處也。有説云、五月
 247 八日神來降者。上坐部云、十五日者。与此方
 248 述、微復不同、豈有異邪。至如來夏所尚、素
 249 王為聖、將定年筭、前遠猶迷。況復曆有三伐、
 250 述時紀号、猶自差舛。頡惟理越情求、赴機應
 感、皆乘樞道、適變為先。豈以常人之耳目、明

235 守目、「自」の誤写。
 238 桶「搦」の誤写。
 243 代、「伐」の誤写。
 248 來、「東」の誤写。
 249 伐、「代」の誤写。
 250 頡、「顧」の誤写。

272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260 259 258 257 256 255 254 253 252

通於至極也。城之南北、有過去二佛生地諸塔、育王石柱、銘記其多。都城西北、數百千塔、並是瑠璃所誅諸釋。見是聖者、後人為造。當斯時也、有四釋子、忿甚見逼、不思犯戒、出外拒軍、瑠璃遂退。後還本國、城中不受、告曰、「吾為法種、誓不行師。汝退彼軍、非吾族也。」既被放斥、遠投諸國、本是聖胤、競宗樹之。今烏仗梵衍等王、並其後也。城東百里、即是如來生地之林、今尚存焉。或有說者、三月八日。上坐部云、十五日也。此土諸經咸云、四月八日。斯亦咸見之機、異計多耳。又東七里、云至拘尸。中途諸異、畧不復紀。創達此城、不覺五情失守、崩踊覽地。頃之顧眄、但見荒城頽穢、純陁宅基、有標誌耳。西北四里、河之西岸、即安羅大林。周迎輪住四十餘里、中央高竦、即涅槃地。有一輒室、卧象北首。旁施塔柱、具舒銘記。而諸說混淆、通列其上。有云、三月十五日入涅槃者。或云、九月八日涅槃者。或云、自彼今、過千五百年者。或云、過九百年者。城北度河、即焚身地。方二里餘、深三丈許、土尚黃黑、狀同焦炭。諸國有病、服其土者、无不除愈。故其焚處、致

255 甚、「其」の誤写。

262 云、咸、「感」の誤写。

266 住、「徑」の誤写。
267 銘、「銘」の誤写。

293 292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273

有坳耳。其側復有現足分身雉鹿諸塔、並具
瞻已。又西南行大深林中、七百餘里、達婆羅
痾癩國、即常所謂波羅奈也。城臨菟伽、外道
殷盛、乃出万計、天寺百餘、多遵自在。僧徒三
千、並小乘正量部也。王觀※都※波羅奈河之
西、境柱※雙建、育王所意。影現佛象、觀者興敬。
度河十里、即鹿野寺也。周閭重閣、望若仙宮、
僧減二千、皆同前部。佛事高勝、諸國最矣。中
有轉法輪象、狀如言說。旁樹石柱、高七十餘
尺。内影外現、衆相備委、斯即如来初轉法處。
其側復有五百獨覺塔、三佛行坐處、寺中銘
塔、靈迹極多、乃有數百。又有所洽池、浣衣洗
器之水、皆有龍護、暴衣方石、鹿王迎佛之地。
並建石塔、動高三百餘尺、相甚弘偉、故略陳
耳。順河東下、減於千里、達吠舍釐、即毗舍離
也。露形異術、偏所豐之。國城舊基、周七十里、
人物冥鮮、但為名地。其中說浄名處、寶積浄
名諸故宅處、身子證果處、姨母滅度、七百結
集、阿難分身處。此之五處、各建勝塔、標示後
代。自斯東北二千餘里、入大雪山、至尼波羅國。
純信於佛、僧有二千、大小兼學。城東有池、

278 277
意境、「都」
立塔、「都」
の誤写。

282
委、「矣」
の誤写。

284
洽、「浴」
の誤写。

288
之、「足」
の誤写。

294 中有天金、光浮水上。古老傳云、弥勒下生、用
 295 為首飾、或有利其寶者、夜往盜之、但見火聚
 296 騰焰、都不可近。今則沉深、叵窮其底、水又極
 297 熱、難得措足。唐國使者、試火投之、焰便踊起。
 298 因用煮米、便得成飯。其境北界之東女国、与
 299 吐蕃接。比來國命往還、率由此地、約指為語。
 300 唐梵相去一万余里、自古徬邇、致途遠阻。又
 301 從吠舍、南濟旻河、達摩伽陁國、即摩竭提之
 302 正号也。其國所居、是為中印度矣。今王祖胤、
 303 繼接无憂、无憂即頻毗娑羅之曾孫也、王即戒
 304 日之女智矣。今所治城、非古所築。旻伽南岸、
 305 有波吒釐城、周七十里、即經所謂花氏城也。
 306 王宮多花、故因焉。昔阿育王、自新王舍遷都
 307 於此。左側聖所、其量弥繁。城之西南四百餘
 308 里、度尼連禪河、至伽耶城。人物希少、可千餘
 309 家。又行六里、有伽耶山、自古諸王所登封也。
 310 故此一山、世稱名地。如来應俗、就斯成道。頂
 311 有石塔、高百餘尺、即寶雲等經所說之處。山
 312 之西南、即道成處、有金剛坐、周百餘步。其地
 313 則今所謂菩提寺是也。寺南有菩提樹、高五
 314 丈餘、遶樹周垣、壘甃為之、輪迴五百餘步。東

298 飲、「飯」の誤写。

335 334 333 332 331 330 329 328 327 326 325 324 323 322 321 320 319 318 317 316 315

門對河、北門通寺、院中靈塔、相狀多矣。如来得道之日、互説不[※]、或云三月八日、及十五日者。垣北門外大菩提寺、下院三層、牆高四丈、皆甃為之。師子國王、四取此處、興造斯寺。僧徒僅千、大乘上坐部所住持也。有骨舍利、狀人指節。肉舍利者、大如真珠。彼土十二月三十日、當此方正月十五日、世大神變月。若至其月、必放光瑞、天雨奇花、充滿樹院。契初到此、不覺悶絕、良支蘊醒、歷觀靈相。昔聞經説、今宛目前。恨居邊鄙、生在末世、不見真容、倍復悶絕。旁有梵僧、就地接撫、相与悲慰。雖備礼謁、恨無光瑞。停止安居、迄於解坐。彼土常法、至於此時、道俗千万、七日七夜、競申供養。凡有兩意、謂觀光相及希樹葉。每年樹葉、拾[※]至夏末、一時飛下、通夕新抽、与故齊等。時有大乘居士、為契開釋瑜伽師。余夜對講、忽失燈明。又觀所佩珠璫瓔珞、不見光采、但有通明晃朗、内外洞然。事不測其由也。怪斯所以、共出草廬、望菩薩樹、乃見有僧手擎舍利、大如人指、在樹基上、遍示大衆。所放光明、照燭天地。于時衆時衆開[※]、但得遙礼、目雖觀瑞、心疑其

335 開^{時衆、衍字。}「開」の誤写。

333 薩、「提」の誤写。

328 拾、「恰」の誤写。

323 支、「久」の誤写。

318 四、「買」の誤写。

356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343 342 341 340 339 338 337 336
 大。合掌虔跪、乃至明晨、心漸萎頓、光亦歇滅。
 居士問曰、「既覩靈瑞、心无疑邪。」樊具陳言。居
 士曰、「尔之昔疑、還同此也。其瑞既現、疑自通
 耳。」余見菩提樹葉、如此白楊、具以問之。樊曰、「相
 狀畧同、而狀踈茂盛、少有異也。」於此寺東、望
 屈屈吒播陀山、即經所謂鷄足山也。直上三
 峰、狀如鷄足、因取号焉。去菩提寺一百餘里、
 頂樹大塔、夜放神炬、光明通照、即大迦葉波
 寂定所也。路極梗澀、多諸林竹、師子虎象、縱
 橫騰倚、每思登踐、取進无由。樊乃告王、請諸
 防後。蒙給丘三百餘人、各備鋒刃、斬竹通道、
 日行十里。今時彼國、聞樊往山、土女大小、數
 盈十万、奔隨繼至、共往鷄足。既達山阿、辟立
 无路、乃縛竹為梯、相連而上。達山頂者、三千
 餘人、四眺欣然、轉憎喜踊、具覩石罅、敬花供
 養。自山東北、百有餘里、至佛陁代那山、有大
 石室。佛曾遊此、天帝就石塗香以供。行至其
 處、今猶郁烈。不遠山室、可受千人。如來三月、
 於中夏坐、岳石為道、廣二十步、長五里許、即頻
 毗沙羅脩觀上山之所由也。又東六十、便至矩
 夸揭羅補占城、唐言第城、多出香茅、故因

356
 第占夸、
 茅古奢
 のののの
 誤誤誤誤
 写写写写。

351 350
 代、增
 伐の
 の誤誤
 の誤写。

348 347 346
 辟、土、丘
 壁土兵
 ののの
 の誤誤
 の誤写。

336
 大、火
 の誤写。

377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361 360 359 358 357
 名也。其城即摩揭陁之正中、經本所謂王舍
 城者是矣。崇山四周、為其外郭、上加僻倪、皆
 輒為之。西通小徑[※]、北關山門、廣長從狹、周輪
 百五十里。其中宮城、周三十餘里、內諸古迹、其量
 復多。宮之東北可十五里、有始栗陁羅矩吒
 山、即經所謂耑峯者是也、唐言鷲峯之
 臺。於諸山中最髙、顯映奪。接山之陽、佛多居
 住。從下至頂、編石為階、唐十餘步、長六里許、
 佛常往來於斯道也。歷觀崖岫、備諸古迹、不
 可勝紀、廣如圖傳。山城北門強一里許、即迦
 蘭陁竹林精舍石基。東戶輒室、今仍現在。自
 園西南行六里許、南山之險、大竹林中、有石
 室焉。即大迦葉波与千无學、結集經教所
 託之地。又西廿餘里、即大衆部結集處也。山
 城之北可五里許、至曷羅聞[※]如利呬城、唐言
 新王舍也、餘傳所稱者是矣。又北卅餘里、至
 那爛陁寺、唐言施无獸也。瞻部洲中寺之最
 者、勿高此矣。五王共造、供給倍隆、故因名焉。
 其寺都有五院、同一大門、用閭四重、高八丈
 許、並用輒壘。其最上壁、猶厚六尺、郭三重、牆
 亦輒壘、高五丈許、中間各遠[※]極深池壘。備有

377	375	371	368	364
遠、	用、	如聞、	險、	唐、
「遠」	「周」	「閩」	「陰」	「廣」
の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。

378 花畜、嚴麗可觀。自置已來、防衛清肅、女人非
 379 濫、未曾客隱。常住僧衆餘人、外客道俗、通及
 380 邪正、乃出萬數、皆周給衣食、无有窮竭、故復
 381 号寺為施无厭也。中有佛院、備諸聖迹。精舍
 382 高者、廿餘丈、佛昔於中四月說法。又有精舍、
 383 高卅餘丈、中諸變態、不可名悉。置立銅象、高
 384 八丈餘、六層閣盛、莊嚴綺飾、即戒日之兄滿胄
 385 王造也。又有鑿石精舍、高可八丈、戒日親造、
 386 彫莊未備、日役千工。彼國常法、欽敬德望。有
 387 諸論師、智識清遠、王給封戶、乃至十城、漸降
 388 量賞、不滅三城。其寺現在受封大德三百餘
 389 人、通經已上、不掌僧役、重愛學問、諮訪異法
 390 故焉。耆巴西、被於海内、諸出家者、皆多義學、
 391 任国追師、都无隔礙。王雖守國、不敢遮障。故
 392 彼學徒、博聞說瞻、率由於此。契初達寺、義學
 393 有聲、諸有内外、聞皆歸起。十有八日、暨大論
 394 場、邪正翕集、乃有萬數、思欲讎擊、三千餘人。
 395 既登无坐、以己舊解、用相相抗對、得无礙後。僧
 396 衆大悅、各稱慶快、佛法興矣、乃令邊僧權智
 397 若此。又此寺法、通達三藏、員置十人、素來闕
 398 一、周訪未獲。以契言問博詣、用元其位、和僧永

398	395	394	393	392	390	388	380
元、	杭相、	繫、	起、	說、	巳、	滅、	出、
「充」	「抗」	「擊」	「赴」	「該」	「巳」	「滅」	「至」
の誤写。	衍字。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。

399 住、日給上饌二十盤。初盛斯供、辭不敢受。僉曰、
 400 「寺法恒尔、客僧初至、觀其能解通三藏者、給
 401 二十盤、即二十日、餘者漸減。通一經者、猶須前供
 402 五盤。五日過已往、自依常限。」時有順世外道、
 403 執計四大、為人物因、情議沉蜜、最難徵西敷。
 404 美聞此寺豐諸論士、故桶議書僧堂戶、尅日
 405 擊論。彼土常法、輪有塞者、先令乘驢、屎瓶澆
 406 頂、公於衆中、形心折伏。然後依隨、永衣僕隸。且
 407 自義論之、設機變適、緣脫致一差、終身陷
 408 辱、衆雖万數、都无當者。奘經停既久、薄究
 409 其術、心愧邊鄙、望行言對、便告大、請与決
 410 論。道俗胥悅、遂乃各立旁證、邪正等數。彼既
 411 陵理、即施切覈、須臾交辨、通解无路、神理沮
 412 喪、溘然伏。預是、釋門一時騰踊、僉命乘驢、將
 413 事恥辱。奘曰、「我法弘恕、不在形科。情既致穎、
 414 當授正法。」異道稟受、敬奉箴誨。度脱之後、便
 415 往東印度境迦摩縷多國童子王所。以彼風
 416 俗、並信異道、故其部衆、乃有數万、佛法雖弘、
 417 未至其土。王事天神、愛重教義、但聞智人、不
 418 問邪正、皆一奉敬其人。初染佛法、將弘聖化、
 419 故於此國、創開釋典、以事達王、嘆奘

401 減、「減」の誤写。

403 西蜜、「密」の誤写。
西敷、「敷」の誤写。

404 桶、「桶」の誤写。

405 輪、「論」の誤写。

406 衣、「充」の誤写。

411 陵、「陳」の誤写。

440 勝度。童子初聞、即使迎引。既達相見、宛若
 439 親賓、言議接對、又經晦朔。斯國東境接蜀西
 438 蠻、聞之途路、兩月應至。戒日大王聞臣告曰、
 437 「東蕃印度童子王所、有大脂那沙門大乘天
 436 者、道德弘遠、彼所奉事、請往致之。」其大乘天
 435 号、即印度諸僧美奘之目也。戒日既聞、即遣
 434 召与俱来。會中印度、自与官属百餘万衆、順
 433 河東下、同集摩伽。一与面對、歛然道合、從尔長
 432 參正坐、論諸理義。時月經文、延還本邑曲女
 431 王者、觀其所設、五年大施。晚又辞還施无厭
 430 寺。初有論師、名曰戒賢、年将百歲、大小通給、
 衆共推美。其人即室商王佉之所坑者、為賊
 429 擎出、潜淪草莽。後法重興、開弘經論、道俗欽
 428 重。戒日增邑十城戸也。諸有科税、一任戒賢、賢
 427 乃以其税物、成立寺廣。奘初奉謁、稟歸師傳、投
 426 心啓請。年雖遲暮、課力敷演、瑜伽師地、即十
 425 七地也論。十有三月、方得一遍、重為再講、九月
 424 方了。諸餘異論、无暇旁求。此論包舉釋宗、
 423 統周大小、故偏所纘習、經於五載、薄知綱領、
 422 将行博議、未忍東旋。賢乃誠曰、「吾老矣。見子
 421 徇命求法、經途十載、方達茲土、不辞朽老、重

440 士、「土」の誤写。

437 論、墨書入れにより補入。
 436 也論、「論也」の誤写。

434 廣、「廟」の誤写。

429 者、「都」の誤写。
 428 文、「久」の誤写。

425 目、「日」の誤写。

462 即龍樹也。其寺上下五重、鑿石為之、引水旋
 463 注、多諸變異、法波達今。淨人固守、罕有登者。
 464 龕中石象、形極偉大。寺成之日、龍猛就山、以藥
 465 塗之、變成紫金、世无等者。又有經藏、甲縛无
 466 數、占老相傳、盡初結集、並現在在。雖外佛
 467 法、屢遭誅殄、而此一山、住持无改。近有僧來、於
 468 彼夏坐、但得讀誦、不許持出。具陳此事、但路
 469 幽阻、可尋問。又復南行七千餘里、路經五國、
 470 並有靈迹、至秣羅雉吒國、即瞻部最南濱海
 471 境也。山出龍腦香焉。旁有巖頂、清流繞旋、甘
 472 許迎、南往大海。中有天宮、觀自在菩薩常所
 473 住處、即觀世音之正名也。臨海有城、古師子國、
 474 今入海中可三千餘里。非結大伴、則不可至、故
 475 不行也。自此西北四千餘里、中途經國、
 476 具諸神異、達摩訶刺他國。其王果勇、威英自
 477 在、未賓戒日。寺有百餘、僧徒五千、大小兼學。
 478 東境山寺、羅漢所造、有大精舍、見者无不嘆
 479 訝、駭斯神也。自此因脩廣行諸國、還中印度、
 480 抄寫新經、東莊首路。行旻河側、忽被秋賊須、
 481 須人祭天。同舟三十許人、悉被執縛、唯選奘公
 482 北充食調。結壇河上、置奘壇中、初便生饗、

482 北、
「比」
の誤写。

480 須秋莊、
「裝」
「被」
「衍」
字。
の誤写。

472 住、
「注」
の誤写。

466 在占、
「古」
「存」
の誤写。

483 將加鼎鑊。當斯時也、取救无縁、注相東夏、
 住持三寶、秘發誓曰、「餘運未絶、食蒙放免、必
 其无遇、命也如何。」同舟一時悲啼蹶哭、告諸
 486 諸賊曰、「此人愆。不辭危難、專心為法、利益
 邊垂。君若刹之、罪莫大也。寧利我等、不得
 488 損他。」衆賊聞之、投刃礼愧、放隨所往。仍集經
 論、餘國傳貨、重還本寺、更集經論。不久之間、
 490 戒日聞之、重勅所部、遞送生境、并親青象、
 以充馱運。裝為形極充大、日別常料、草卅圍、
 491 餅食所須、又三斛許、辭以寡力、不能勝致。戒
 492 日又勅、「齊所統境、隨國供擬、非所攝者、以書
 493 及之。」諸有梵僧、又勸受施、皆曰、「斯勝相也。佛
 494 滅度未、王雖崇敬、種種布施、未聞以象用
 495 及釋門。象為國寶、今既見惠、信之極矣。」因即納
 497 之。然其象也、其形圓大、高可丈三、長二丈許、
 498 上容八人、并諸什物經像等具、并在其上。
 499 相然如重、都似空行、雖逢奔逸、而安穩不墜、
 500 瓶水不側。縁國北旋、出印度境。戒日威被、咸
 501 蒙供侍。入帛利國、山川相^半沃壤豐熟。僧徒
 502 數万、並學大乘。東北山^{行補}過諸城邑、上大雪山。
 及之其頂、諸山並下、又上三日、達最高嶺。南

502 行、 墨書入れにより補入。	501 半、 墨書入れにより補入。	499 都、 然、 「観」 の誤写。	495 未、 「米」 の誤写。	492 斛、 「斛」 の誤写。	490 生、 「出」 の誤写。	486 諸、 衍字。	485 蹶、 「號」 の誤写。	484 食、 「會」 の誤写。	483 相、 「想」 の誤写。
-------------------------	-------------------------	--------------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------

北通望、但見橫山、各有九重、過斯已往、皆是平地。雖有小山、孤斷不續。唯斯一嶺、曼延高遠。約略為言、瞻部一洲、山叢斯地。何以知邪。至如西境波斯、平川眇漫、東尋嵬岑、莫有窮蹤。北則橫野蕭條、南則印度臯衍、即經所謂香山者也。達池幽邃、未可尋源、四河所從、皆由斯出。余邪所謂崑崙之靈、豈非斯邪。案諸禹貢、河出積石、蓋局談其潛出處耳。張騫尋之、乃遊大夏。固是超步口經、猶不言其發源之始、斷可知矣。樊引徒前後、自勒行衆、沿嶺而下、三日至地、達覲貨羅諸故都邑。山行八百、路極艱險、寒風切骨、到於活國。中途所經、皆屬北狄。而此王者、突厥之胤、纔管諸胡、捺御鐵門以南諸小國也。自此境東、方入葱嶺。嶺據瞻部洲中、南接雪山、北至熱海、東漸烏澗、西極波斯。縱廣結固各數千里。冬夏積雪、水嚴崖濂。過半已下、多出山葱、故因名焉。昔人云、葱嶺停雪即雪山也。今親目驗、則知其非。雪山乃居葱嶺已南、東西亘海、南至平野、北達叢山、方名葱嶺。又東山行、經於十國二千餘里、至達摩悉鐵帝國。境在山間、東西

512 口、「日」の誤写。

518 至、墨書入れにより補入。

545 544 543 542 541 540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525

千六百里、南北極廣、不踰四五里許。臨縛菊
 河、從南而來、不測其本。僧寺十有餘一百象上、
 施金銅圓蓋。人有施遶、蓋亦隨轉、豈由機
 巧、莫測其然。又東山行近有千里、遶商弥國。
 東至大川、廣千餘里、南北百餘里、絕无人住。
 有龍池、東西三百、南北五十。其池正在大慈
 嶺内、瞻部洲中最高地也。何以明之。池出
 二河、其西流者、至達摩悉鐵國、与縛蜀河合、
 自此已西、水皆西流。其東流者、至佉沙西界、
 与徒多河合、自此已東、水皆東流。故分二河、
 各注兩海、故知高也。池出大鳥、卵如斗許。案
 條支國、大卵如甕、豈非斯邪。又東五百、至竭
 盤陁國。北背徒多河、即經所謂悉陁河也。東
 又塩澤、潜於地中、涌於積石、為東夏河矣。國
 崇信佛法。城之東南三百餘里、大崖兩室、各
 一羅漢、現入滅定。七百餘年、頌髮漸長、左近
 諸僧、年別為剃。又東千餘、方出葱嶺、至烏鍬
 國、城臨徒多。西有大山、崖自崩墜。中有僧焉、
 冥目而坐、而刑甚奇伴、頌髮下垂、至於眉面。
 問其委由、乃迦葉佛時人矣。近重崩崖、沒於
 山内。奘至斯國、与別行、先度雪河、象晚方至。

543	542	540	538	537	534	530	528	527	526	525
眉頌	伴刑徒	頌	又	徒	徒	慈	遶	施	有餘	菊
「肩」	「伴」	「須」	「入」	「徒」	「徒」	「慈」	「遶」	「施」	「有餘」	「菊」
「須」	「伴」	「須」	「入」	「徒」	「徒」	「慈」	「遶」	「施」	「有餘」	「菊」
「須」	「伴」	「須」	「入」	「徒」	「徒」	「慈」	「遶」	「施」	「有餘」	「菊」
の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤	の誤
写	写	写	写	写	写	写	写	写	写	写
か	写	写	写	写	写	写	写	写	写	写

566 565 564 563 562 561 560 559 558 557 556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546
 水漸沉漲、不悉山道、尋嶺直下、牙衝岸樹。象
 性凶獷、反拔劫頓、因即致死。悵悵所經已越
 山險、將達平壤、不果祈願。東過踈勒、乃至涅
 渠、可千餘里。同伴五百、皆共推奘、為大商至、
 處位中營、四面防守。且涅渠一國、素來常鎮
 十部大經、各十萬偈。如前所傳、國寶護之、不
 許分散。今屬突厥。南有大山、現三羅漢入滅
 盡定。東行八百、達于遁國、地惟沙壤。寺有百
 餘、僧徒五千、並小乘學。城西山寺、佛僧遊踐、
 有大石室、羅漢入定、石門封掩。初奘既度、
 葱嶺、先遣侍人賈表陳露違國化也。下勅流門、
 令早相見。行達于道、以象致死、所賣經象、交
 无運致、又上表請。尋別
 勅、令于遁王給其安革乘。既奉嚴勅、駝馬相
 運、至于沙州。又蒙別勅、計其行程、酬雇價
 真。自尔乘傳二十許乘、以真觀十九年正月二十
 四日、居于京郊之西。道俗相趨、屯起闐闐、數
 十萬衆、如值下生。將欲入都、人物誼擁、取進
 不前。遂停別舒、通夕禁衛。候備遮斷、停住道
 旁。從故城之西南、至京師朱雀衛之都亭驛、
 二十餘里、列衆礼謁、動不得旋。于時駕幸洛陽、

565	564	562	561	559	557	556	550	548	547	546
衛、	舒、	起、	真、	安革、	道、	門、	涅、	涅、	劫、	岸、
「街」	「館」	「赴」	「真」	「鞍」	「遁」	「問」	「沮」	「沮」	「却」	「崖」
の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。	の誤写。

587 586 585 584 583 582 581 580 579 578 577 576 575 574 573 572 571 570 569 568 567

奘乃留諸經象、送弘福寺。京邑僧衆、邑競列
 憧悵、助運莊嚴。四部誼譚、又倍初至。當斯時
 也、復感瑞雲、現千昆、團圓如蓋、紅白相映、當
 于象上、顯發輪光。既非遠日、同共嗟仰、從午
 至脯、象入弘福、方始歇滅。致使京都五日、四
 民廢業、七衆歸羨。當此一時、傾仰之高、終古罕
 類也。奘雖逢榮問、獨守舒守、坐鎮清閑、恐陷
 物議、故不臨對。及至洛濱、特蒙問、并獻諸異
 物、八馬馱之。別勅引深宮之內殿、奉面天顏。
 談敍真俗、无爽帝旨。從卯至酉、不覺時延、
 迄于閤鼓。上即事戒旃、問罪遠在。明旦將
 發、下勅同行、固辭疾苦、兼陳翻譯。不違
 其請、乃勅京師留守梁國公房玄齡、寺知監
 護、資備所須、一出天府。初奘在印度、聲暢
 五天、稱述脂那人物為盛。戒日大王并菩提寺
 僧、思聞此國、為日久矣。但无信使、未可依憑。
 彼土常傳、瞻部一洲、四王所治。東謂脂那主、人王
 也。西謂波斯主、寶王也。南謂印度主、象王也。
 北謂獫狁主、馬王也。皆謂四國、藉斯以治、即
 因為言。奘既安達、恰述符同。戒日及僧、各遣
 中使、賫諸經寶、遠獻東夏。是則天竺信命、

569 568
 千、「于」の誤写。
 昆、「日北」の誤写。

573
 舒守、「館字」の誤写。

577
 在、「左」の誤写。

583
 士、「土」の誤写。

608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595 594 593 592 591 590 589 588
 自契西通、宣述皇猷之所致也。使既而西返、又
 勅王玄策等廿餘人、隨往大夏。并贈綾帛、
 千有餘段、王及僧等、數各有差。并就菩提
 寺僧、召石蜜匠。乃遣匠二人・僧八人、俱到東
 夏。尋勅往越州、就月蔗造之、皆得成就。先是
 菩提寺僧三人送經初至。下
 勅、普請京城設齋、仍於弘福譯『大嚴』等經。不
 久之間、契信又至。乃勅且停、待到方譯。主上虛
 心仰、頻下明勅、令契速至。但為事故留連、不
 早程達。既見路宮、深沃靈相。即陳翻譯、搜擢
 賢明。上曰、「法師唐梵具瞻、詞理通敏、將恐
 徒揚仄陋、終虧聖曲。」契曰、「昔者二秦之譯、門
 位三千、雖復翻傳、猶恐後代無聞、懷疑乖信。
 若不搜擢、同奉玄規、豈以獮能、妄參朝委。」頻
 又固請、乃蒙降許。帝曰、「自法師行後、造弘福
 寺。其處雖小、禪院虛靜、可為翻譯。所須人物
 吏力、並与玄齡商量、務令優給。」既表明命、返
 迹京師。遂召沙門慧明・靈闍等以為證義、沙
 門行友・玄曠等以為綴緝、沙門智證等以為
 錄文、沙門玄摸[※]以證梵語、沙門玄應[※]以定守[※]
 偽。其年五月、創開翻譯。大菩薩藏經二十卷、余

607 守摸、
「摸」
字「模」
の誤写。

601 獮復、
「復」
偏「復」
の誤写。

599 曲、
「典」
の誤写。

597 596 虛心、「慮」
路、「洛」の誤写。
の誤写。

592 月、「甘」
の誤写。

629 628 627 626 625 624 623 622 621 620 619 618 617 616 615 614 613 612 611 610 609

為執筆、并刪綴詞理。其經廣解六度・四攝・十力・四无畏・三十七品法※菩薩行、舍十二品、將四百紙。又復旁翻顯揚聖教論廿卷、智證等更迭錄文、沙門行友詳義理文句、奘※云於論重加陶練。次又翻大乘對法論一十五卷、沙門玄曠筆受。微有餘隙、又出西域傳一十二卷、沙門辨機、親受時事、連紙前後。兼出佛地・六門神咒等經、都合八十許卷。自前代已來、所譯經義、初從梵語、到寫本文、次乃廻※之、順同此俗、然後筆人覲理文句。中間增損、多墜金言。今所翻傳、都由奘旨、意里獨新※、出語成章、詞人隨寫、即可披翫、尚賢吳魏所譯諸文。但為西梵所重、貴於文句、鉤瑣聰類、重水布在。唐文頗居繁複、故使綴工專司此位、所以貫通詞義、加度節之、銓本勒成、秘書出繕寫。奘乃悉表上、并請序題。尋降手勅曰、「法師風標高行、早出塵表。泛寶舟而登彼岸、搜妙道而闢法門。弘闡大猷、蕩滌衆累。是以慈雲欲卷、舒之廕四空、慧日將民、朗之照八極。舒朗之者、其唯法師乎。朕學淺心拙、在物猶迷、況佛教幽微、豈敢仰測。請為經題、非已所聞。其新撰『西

627	624	621	619	618	617	612	610
民、「昏」の誤写。	風「夙」の誤写。	水布、「沓置」の誤写か。	新、「斷」の誤写。	覲「親」の誤写か。	廻、「廻」の誤写か。	云、「公」の誤写。	舍法、「諸合」の誤写。

630 城傳』者、當自披覽。」奘以弘贊之極、勿尚帝王、
 631 開化流布、自古為重。又表、「伏奉墨
 632 勅、撰垂獎諭。秘奉綸言、精守振越。玄奘業尚
 633 空疎、謬參法侶。幸屬九瀛、有截四表无虞。晃
 634 皇雲以遠征、恃國威而訪道。窮進冒險、雖勵
 635 愚誠、纂異懷荒、寔資朝化。所獲經論、奉勅
 636 翻譯、見成卷軸、夫有詮序。伏惟、陛下睿思雲
 637 敷、天華景爛、理包繫象、調逸成英。跨千古
 638 以飛聲、掩百王而騰實。竊以神力无方、非神
 639 思不足詮其理、聖教玄遠、非聖藻何以序其
 640 源。故乃冒犯威嚴、敢希題目。宸睭冲貌、不乘
 641 矜許。撫躬累息、相顧失齒。玄奘聞、日月麗天、
 642 既分暉於戶牖、江河紀地、亦流潤於巖涯。雲和廣
 643 樂、不秘響於龔味、臺壁竒珍、豈韜彩於愚
 644 瞽。敢緣斯理、重以于祈。伏乞、雷雨曲垂、天文府
 645 照、配兩儀而同久、与二耀而俱懸。奘則鷲嶺
 646 微言、假神筆而弘遠、雞園奧義、託英詞而宣
 647 暢。豈止區區梵衆獨荷恩榮、亦使蠢蠢迷生方
 648 超塵累」。而表奏之日、勅乃許焉。仍寫新經、遠
 649 頒預國。故一序文通於三藏、其詞曰、「蓋聞二
 650 儀有象、顛覆載以含生、四時无形、潛寒暑以化

630 勿城、
 「城」の誤写か。

632 撰、
 「撰」か。

634 雲、
 「雲」の誤写。

636 夫、
 「未」の誤写。

637 成、
 「成」の誤写。

640 乘貌、
 「垂」の誤写。
 641 齒、
 「圖」の異体字。

645 奘、
 「然」の誤写。

649 預、
 「邦」の誤写。

691 690 689 688 687 686 685 684 683 682 681 680 679 678 677 676 675 674 673 672 671

致謝。」自尔朝宰英達、咸申擊贊、釋宗弘盛、氣
 接成陰。皇太子述上所作三藏聖教序曰、「夫
 顯揚正教、非智无以廣其文、崇闡微言、非賢
 莫能定其旨。」云。文廣不可具載。弘福寺僧欣
 奉中興、度斯榮泰、乃以序文勒雋玄石、足使
 万古延風、景仰无贊、故其表」云。下勅許之。今
 之門首大碑是也。及使再返、又勅二十餘人隨往
 印度。前來國命、通議中書。勅以還城方言、務取
 符會、若非伊、將淪聲教。故諸信命、並資於
 奘、乃為唐言、依彼西梵文詞輕重、令彼談者尊
 崇東夏。尋又下勅、令翻老子五千文為梵言、
 以達西域。奘乃召諸黃巾、述其玄奧、領疊詞旨、
 方為翻述。道士蔡晃・成英等、競引譯論中百
 玄意、用通道經。奘曰、「佛道兩教、其旨天殊、安用
 佛言、用通道義。窮西敷言疏、奉出無從。」晃歸
 情曰、「自昔相傳、祖憑佛教。至於三論、晃所師遵、
 准義幽通、不无同會引解也。如僧肇著論、
 盛引老莊、猶自申明、不相為怪。佛言似道、何
 爽綸言。」奘曰、「佛教初開、深文尚權、老談玄理、
 微附佛言。肇論所傳、引為聰類、告以喩詞、而
 來通極。今經論繁富、各有司南。老但五千、論

673 崇、「宗」の誤写。

676 675 无、「度」「慶」の誤写。
 「天」の誤写。

683 譯、「釋」の誤写。

685 西敷、「嚴」の誤写。

712 711 710 709 708 707 706 705 704 703 702 701 700 699 698 697 696 695 694 693 692

无文解。自餘千卷、多是醫方。至如此士賢明、
 何晏・王弼・周顛・蕭婢[※]・顧歆之徒、動數十家、注
 解老子。何不引用、乃復旁通釋氏、不乃推步
 逸蹤乎。」既依翻了、將欲封勒。道士成英曰、「老
 經幽邃、非夫序引、何以相通、請為翻之。」[※] 奘
 曰、「觀老治身治國之文、文詞具矣。叩齒咽
 液之序、其言鄙陋、將恐西聞異國、有愧鄉邦。」
 英等以事聞諸宰輔、奘又陳露其情。中書寫[※]
 周曰、「西域有道如李炷不。」奘曰、「九十六道、並
 欲超生、師兼有滯、致淪諸有。至如順世四大
 之術、冥初六諦之宗、東夏所未言也。若翻老
 序、則恐彼以為笑林。」遂不譯之。當今正翻瑜
 伽師地卅餘卷。其論梵本可十方偈、若度
 唐文、應出百卷。春秋三十有五、年德俱盛、
 日吐新文。請益之徒後進非少、自應別紀、
 故不敘之。余以闇昧、濫沾斯席。与之對晤、屢
 展炎涼、聽言觀行、名實相守。精厲晨昏、
 計時分業、虔虔不懈、專思法務。言无名利、
 行紀虛浮、曲識機緣、善通物性。不倨不詭、
 行藏適時、吐味幽深、辨開疑議、寔季氏之
 英賢、乃佛宗之法將矣。[※]且發蒙入法、持異常

712 711 710
 持、氏、紀、
 「特」「代」「絶」
 の誤写。

705 704
 三、方、
 「四」「万」
 の誤写か。

699
 寫、「馬」
 の誤写。

693 692
 婢、「土」
 「釋」の誤写。

733 732 731 730 729 728 727 726 725 724 723 722 721 720 719 718 717 716 715 714 713

倫、聽覽經論、用為恒任。既周東夏、挹酌諸師、披露肝膽、盡其精義、莫不傾倒林藪、更新學府。遂能不遠數萬、諮求勝法、誓捨命、必會為斯。發跡張掖、途次龍沙、中途艱險、身心僅絕。既達高昌、倍光來價、傳國祖送、備閱靈儀。路出鐵門・石門、躬乘沙嶺・雪嶺。歷天險而志途據慨、遭凶賊而神弼厲勇。兼以歸稟正教、師兼戒賢。理遂言揚、義非再授。廣聞異論、包藏匈臆、致使梵侶傾心、不遺其法。又以起信一論、文出馬鳴、彼土諸僧思羨其本。壯乃譯唐為梵、通布五天。斯則法化之緣、東西互舉。又西華餘論、深尚聲明。奘乃卑心請決、隨授曉致、有七變其勢、動發異縱。三脩廣論、恢張懷抱。故得施无骸寺三千學僧皆号智囊、護持城塹、及覩其脣吻、聽其詞義、皆彈指指贊嘆、何斯人也。隨其遊歷塞外海東百三十國、道俗邪正、羨其名者、莫不仰德歸依、更崇開信。所以家國增榮、光宅惟遠、獻奉歲至、咸奘之功。若非天英靈、生知聖授、何能振斯鴻緒、道達蹤。前後僧傳往天竺者、首自法顯・法勇、終于道邃・生、相繼中余、一十七

733 余、「途」の誤写。

727 指、衍字。

726 骸、「獸」の誤写。
725 縱、「蹤」の誤写。

722 壯、「奘」の誤写。

720 揚、「揚」の誤写。

719 據、「慷」の誤写。

718 途、「逾」の誤写。

716 斯、「期」の誤写

714 膽、「膽」の誤写。

775 774 773 772 771 770 769 768 767 766 765 764 763 762 761 760 759 758 757 756 755

獨斷、惟任筆功。縱有覆疎、還遵舊緒。梵僧
執葉、相等情乖、音悟莫通、是非俱濫。至如三
學成典、惟詮行旨、八籍微言、宗開詞義。前
翻後出、靡墜風猷、古哲今賢、聽殊恒律。豈非
方言重阻、臆斷是提、世轉沈波、奄同浮俗。昔聞
淳風邪暢、既在皇唐、綺訛新、寔鍾季葉。不
風暢。既在皇唐、鋒飾訛新、寔鍾季葉。不思
本實、安接詞鋒、競掇蕩蕩、鄙聲難偃。原夫
大學希言、絕世特立、八音四辨、演暢无恨。安
得凡懷虛參聖慮、用為標擬、誠非立言。雖復
樂說不窮、隨類各解、理開情外、調逸中。故當
斧藻標奇、文高金玉、方可聲通天樂、韻過
恒致。近者晉宋顏謝之文、世尚企而无比。況乖於
此、安可言乎。必慳前蹤、時俗變矣。其中蕪亂、
安足涉言。往者西涼法識、世号通人、後秦童
壽、時稱僧傑。善披文意、妙顯經心、會達言方、
風骨流便、弘衍於世、不虧傳述。守有開士慧
嚴・寶雲、世係賢明、教興前作、傳度廣部、聰輝
絕蹤。將非而奉華骨、親美詰訓、得使聲流十
載、故其然矣。餘則事義相傳、足開神府。寧得
如瓶寫水、不妄助流。薄乳之喻、復存於今日矣。

775 寫、
「瀉」
の誤写。
773 十、骨、而、
「千、骨、面」
のの誤写。
771 守、
「宋」
の誤写。
768 慳、
「腫」
の誤写。
763 恨、學、
「根、覺」
の誤写。
761 新、
「風暢既在皇唐、鋒飾訛
新寔鍾季葉不」
の誤写。
760 洗、
「從」
の誤写。
759 洗、
「澆」
の誤写。
756 悟、
「語」
の誤写。

781 780 779 778 777 776

世有樊公、獨高聰類。往還振動、備盡觀方、百
有餘國、君臣謁敬。言義接對、不待譯人、彼折
幽旨、華戎胥悅。故弘福之譯、不屑古人、執本
陳勘、頻開前失。既闕全乖、未遑釐正、輒略
陳此、夫復何言。

續高僧傳卷第四

777
折彼、
「折」
「彼」
の誤
写。